

日本近代文学館 2019年度冬季企画展

# 詩のありかに触れる

## ささやかな

## 試み

2019年11月30日(土)  
—2020年2月22日(土)

栗原 敦・編集

公益財団法人日本近代文学館・主催

ト  
ポ  
ス  
「橋」「海」  
「道」「空」

生  
成

鮎川信夫「橋上の人」  
をめぐって

声

自作朗読を聴く



# 2019年度冬季企画展 詩のありかに触れる ささやかな試み

**詩**はどこにあるか？ と問えば、それは問う者の内か外か、いずれかの場や空間にそれがあつたことを予定しているかのようです。

また、詩が生まれる予感、と言えば、何らかのきっかけ、動機などの存在が想定されているのかも知れません。

とはいえ、おそらく、詩は絶えずそれらの問いや説明をすり抜けて、いつでも、どこにでもひそんでいて、すべてを越えて見出されることを待っている本質でもあるようです。

そこで、いくつかの共通する契機や場面、トポスといった切り口、また試みられた最初の形が書き改められていった経緯、作品の世界を構成する視線(焦点—視線—視座の転換や交錯、視点位置と語り手・作者の位置の交錯など)が織りなす多様な働きなどを手がかりにして、詩が生まれる様々なあり方を示してみようと考えました。

このささやかな試みが、詩への誘いのひとつとなるなら、この上ない喜びです。

栗原敦(本展編集委員、実践女子大学名誉教授)

## トポス——「橋」「海」「道」「空」

詩作品を掲げるにあたって、まず、いくつかの切り口をキーワード的に掲げて、表現の舞台や場面、あるいは背景、詩的表現へのきっかけ、付与された象徴的な意味など、様々なかたちで、そのキーワードと何らかの接点を持つ詩篇を配置しました。こういったキーワードは、数多く見出すことが出来ますが、このたびは「橋」「海」「道」「空」に絞ることとなりました。

個々の詩篇をはじめとして、相互に見比べて、重なったり、異なったりする世界の交わりや多様性を通じて、詩的表現の面白さ、詩的世界の深みなどを味わっていただくことが出来ると思います。同じ場所に焦点が当てられながら、それぞれの意味合いが、個々の詩篇、個々の作者によって、独自の個性を伴って立ち上がってくることなどがたどれます。

## 生成——鮎川信夫「橋上の人」をめぐって

「橋上の人」、その初稿第一作(全6連、57行)は、1942年10月に入賞(近衛歩兵第四聯隊。1943年4月にスマトラへ転属)する鮎川信夫が「遺書のつもりで残してきた詩」です。掲載された三好豊一郎編集の詩誌『故園』(1943年5月)が「はるばると南方の陣地に送られてきたときの驚きと感激を」忘れなと記しています。1944年5月、傷病兵として内地送還となり、6月大阪港帰着。敗戦後、増補改稿された第二作(全7連、123行)が『ルネサンス』(1948年6月)に掲載され、さらに全面的に増補改稿された第三作(全8章、全16連、238行)が『文学51』(1951年7月)に掲載されました。

初稿第一作の情景は数寄屋橋あたりからの運河をボートで巡る中で得られたようですが、第二稿以降で、中心人物である「橋上の人」を配置する背景を立体的に構築し、その心の中での思いと彼自身の視線、そして、その彼を「あなた」と呼び変える語りの視線を交錯させ、歴史の中の現在を、社会的、時間的に位置づけ直すものへと作品を生成転化させていく表現者の営みは、高村光太郎が「道程」の長大な初稿を極度に刈り込み、組み替えて詩集に収録させたのと、逆の過程として比べることも出来そうです。

## 声——自作朗読を聴く

(川端康成記念室)

\*次の展覧会「震災を書く」でも継続いたします

このコーナーでは、録音された貴重な詩人たちの声をお聞きいただけます。

近代的自我の形成は、沈黙を介して内面を育て、詩的表現においても黙読による受・発信からイメージや想像世界の展開や深化をもたらす意義を持ちましたが、一方、声・音声による詩的表現は、歌や朗唱・朗詠による受・発信などさえも越えた、詩の根源的なあり方を絶えず現在に呼び覚ますものであるとも言えるでしょう。

詩人たちひとりひとりの声による、息づかい、声調、流れやたゆた、中断や停止、飛躍、転調等々から呼吸の示す生命のリズムまで、発語と沈黙との諸々の関わりを感じ取っていただけることと存じます。

川路柳虹 北原白秋 草野心平  
斎藤茂吉 佐藤春夫 高浜虚子  
坪内逍遙 西脇順三郎 萩原朔太郎  
堀口大祐 三好達治 武者小路実篤  
室生犀星 与謝野晶子  
ウィリアム・バトラー・イェイツ  
(栩木伸明氏による書き下ろし解説)  
ウラジーミル・マヤコフスキー(予定)

**開館時間** ・ 9時30分～16時30分  
(入館は16時まで)

**休館日** ・ 日曜、月曜、  
12月27日(金)、  
2020年1月6日(月)、  
1月23日(木)、  
2月11日(火)～15日(土)

**観覧料** ・ 一般300円  
(団体20名様以上は  
一人200円)

**会場** ・ 日本近代文学館 展示室

中学・高校生100円

公益財団法人 日本近代文学館  
THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE  
Komaba, TOKYO



153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55  
(駒場公園内)  
tel 03-3468-4181

<https://www.bungakukan.or.jp/>

京王井の頭線 駒場東大前駅 西口改札より徒歩7分  
※駐車場はございません。公共交通機関をご利用下さい。

